

## 復活節第2主日礼拝説教 「食事を一緒に」

日本基督教団石神井教会 2019年4月28日

### 【使徒書日課】ヨハネの黙示録 19章6～9節

6 わたしはまた、大群衆の声のようなもの、多くの水のとどろきや、激しい雷のようなものが、こう言うのを聞いた。

「ハレルヤ、全能者であり、わたしたちの神である主が王となられた。

7 わたしたちは喜び、大いに喜び、神の栄光をたたえよう。

小羊の婚礼の日が来て、花嫁は用意を整えた。

8 花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。

この麻の衣とは、聖なる者たちの正しい行いである。」

9 それから天使はわたしに、「書き記せ。小羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ」と言い、また、「これは、神の真実の言葉である」とも言った。

### 【福音書日課】ルカによる福音書 24章13～35節

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合っていた。15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在していながら、この数日そこで起こったことを、あなただけはご存じなかったのですか。」19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。22 ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。24 仲間の者が何人が墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」25 そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、26 メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」27 そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

28 一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。29 二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。30 一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。31 すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。32 二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。33 そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、34 本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。35 二人も、道で起こったことや、パンを裂いて下さったときにイエスだと分かった次第を話した。

## 思い起こし、語り合う

主のご復活を祝うイースターから一週間、教会は、イースターの飾りもそのままに過ごしてきました。子どもたちの活動では、今日も《イースターエッグ》の工作をしています。今日の使徒書日課（ヨハネ黙示録 19 章）は、「ハレルヤ、全能者であり、わたしたちの神である主が王となられた」と、天上の礼拝の讃美を歌っていました。ヘンデルがオラトリオ「メサイア」で「ハレルヤ」の合唱曲の歌詞とした聖句の一つです。わたしたちも先週のイースター祝会の席で一緒に「ハレルヤ」を歌いました。地上の教会が歌う「ハレルヤ」は弱々しい者だったかもしれませんが、天上では「ハレルヤ」の讃美がなお力強く響き渡っています。教会のご復活を祝うときは、しばらく続きます。

イースターの祝いの日、皆さんは、どなたかと帰りの道を共にされたでしょうか。あるいは今日、まだイースターの祝いの続く日曜日の教会の帰りを、どなたかと一緒にされるでしょうか。教会からの帰りの道すがら、その日の礼拝のことや教会での出来事を語り合うことのできる友が傍らにいてくれるならば、それは幸いなことです。その日の御言葉や讃美、祈りの言葉、教会の営みのこと、誰かとの触れ合い、といった出来事を、わたしたちは、一人であれば教会の玄関を出た途端に忘れ去って次の用事に思いを向けてしまうかもしれません。けれども、どなたかと共に帰路につくならば、わたしたちは、その日の教会で経験したこと、共に見聞きしたことを、もう一度思い起こし、語り合おうとするのではないのでしょうか。

もちろん、そこで思い起こされること、語り合われることは、良いことばかりではないかもしれません。できれば、うれしかったこと、喜ばしいことを語り合って、分かち合いたいと思いますが、いつもそうできるとは限りません。日曜日の教会に、わたしたちは、心を研ぎ澄ませてやって来ています。普段の生活とは違う心構えで、そこで語られる言葉に耳を傾け、そこで為されている営みに目を向け、そこに共にいる人たちと向き合おうとして来ているのです。そうであればこそ、ここで、良いことも良くないことも、敏感に感じ取るということがあります。教会を出て帰り道を行くときに、自分では処理しきれなかったことを思い起こし、語らずにいられなくなることもあるのです。自分には理解できなかったことを友に訴えるということもあるはずです。誰かから聞かされた悩みや悲しみ、あるいは痛みや憤りを、自分一人では受けとめることができなくて吐き出すということだって、あるかもしれません。けれども、それは、決して否定されるべきことではないと思います。最初のイースターの日、弟子たちが道すがら口にしていたのは、まさにそのようなことだったのでなかったのでしょうか。

その日、朝早く、主イエスのご遺体が納められているはずの墓を訪れた婦人たちは、空の墓を見つけ、そこで輝く衣を着た二人の人に告げられた言葉を、他の弟子たちに伝えていました。弟子のシモン・ペトロも、続いて墓を訪れ、やはり墓が空っぽであることを確認していました。主イエスの弟子だった者たちは、その報告を聞いて、戸惑いを深めてその日を過ごし、帰路に着いていたのです。

## 主イエスだと分かる

主イエスの墓が空っぽになっていた出来事。そこに「復活」を告げる天使らしき者たちがいたということ。そのことを伝えたのが、弟子たちの中ではいつも脇役に甘んじていた婦人たちだったということ。エルサレムから去りエマオに向かった二人の弟子たちが話し合い、論じ合っていたのは、そのことでした。ああでもない、こうでもない、互いの考えをぶつけ合っていたのかもしれませんが。そうすることで、その日の朝に起こった出来事を、自分たちなりに納得し、理解したいと思っていたのでしょう。そこに、見知らぬ旅人が加わってきました。後で気付くことですが、それは、主イエスその人だったのです。

不思議なことです。この二人の弟子は、主イエスの宣教の旅に従って来ていた者たちだったのではなかったのでしょうか。どうして、いつまでもその旅人が主イエスだと気づかなかったのでしょうか。日暮れ近くの薄暗がり、顔がはっきり見えなかったからでしょうか。食事の席についてようやく、食卓に灯された明かりに照らし出されたその顔を見て、主イエスだと分かった、ということなのでしょう。しかし、いくら暗かったといっても、その声は聴いていたのです。毎日生活を共にし、教えを聞かせていただいていた主イエスの声が、分からなかったのでしょうか。それとも、復活すると声は変わる、というのでしょうか。

二人は、しかし、分らなかったのです。いいえ、分からなくてもよかったのだと、福音書はわたしたちに告げようとしているのかもしれませんが。二人の弟子たちは、二人の道行きに同道してくる見知らぬ旅人が主イエスであると、そのとき分からなくてもよかったのです。見知らぬ旅人が、主イエスの教えられたことや為された御業を思い起こして語り、また聖書全体を説き明かしてくれているときも、その人が主イエスだと分かる必要はなかった。ただ、彼らが自分たちの間で起こったことを思い起こし、語り合い論じあっているところに、主イエスのことを語る者が加わってきたのです。聖書の御言葉を説き明かす人が加わってきたのです。そのとき自分たちに語ってくれた見知らぬ人は、誰だったのか。二人は、後から、食事の席でその見知らぬ人が為したこと、**パンを取り、讚美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになるのを見て、そこに主イエスのいらっしゃることに目が開かれていったのです。**あの、自分たちの語り合いに加わって、主イエスのことを語り、聖書を説いてくれた、あの見知らぬ人の中にこそ、主イエスがいらしたことを悟ったのです。

これは、しかし、あのエマオに向かった二人の弟子たちだけの特殊な経験なのではありません。わたしたちが皆、主の日の教会の礼拝ごとに経験していることなのです。わたしたちは、礼拝にあずかるとき、ここにご復活のキリストがおいでくださって、わたしたちにお会いくださっていると、申します。けれども、実際にご復活のキリストのお姿がはっきりと見えている者は、ほとんどいないでしょう。ここにいるのは、主イエスではない者たちです。それでも、ここで主のことが語られ、聖書が説かれ、聖餐の食卓に着くとき、わたしたちは、ここにご復活の主イエス・キリストがおいでくださっていると、分るのです。

## 本当に復活された！

あのエマオに向かった二人の弟子たちが、その道すがら何も思い起こすこともなく、語り合うこともなかったならば、どうなっていたのだろうかと思います。彼らも、主イエスが死んで葬られた後の自分たちの生活のことを考えなければならなかったはずです。自分たちが期待をかけていた方は、亡くなってしまわれたのです。「この人について行こう」と思っていた方は、もはや自分たちの前から取り去られてしまったのです。二人は、すぐにでも明日からのことを決めなければいけないと思っていたかもしれません。故郷に帰るのか、元の仕事に戻るのか、それとも別の期待できる指導者を求めるのか。二人は、そういうことを話し合ってもおかしくはなかったのです。

それでも、この二人のところに、あの見知らぬ旅人は近づいてきてくれたでしょう。近づいてきてくれたかもしれません。それが主イエスであるのならば、わたしたちが途方に暮れているとき、道に迷っているときにこそ、主イエスは近づいてきてくださることでしょう。けれども、そのときに、その見知らぬ人が語ってくれる主イエスのことを弟子たちが聞こうとしたかどうかは、怪しいかもしれません。その旅人が聖書の御言葉を説いて聞かせてくれても、「自分たちが今聞きたいのは、聖書の話ではなくて、この世の生活の現実の話なんだ」と、聞く耳を持たなかったかもしれません。

けれども、彼らは、あの道すがら、良くも悪くも、自分たちと仲間が主イエスの弟子であるために経験した出来事を思い起こし、語り合い、論じ合っていました。そして、二人がその旅人と語らう歩みを停めて、食事の席に着いたとき、パンを取り、讃美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しくださる姿の中に主イエスの存在を認め、振り返って、あのお語りくださっていたのは主イエスの方だったのだと分かるようになった。それこそが、必然だったのではないのでしょうか。

皆さん。教会の中で、牧師には、聖書の御言葉を説き、主イエスの御教えや御業を説く働きが託されています。主の食卓である聖餐を執り行う職務も、牧師に託されています。教会の礼拝は、この二つのことに焦点を絞った営みとして整えられています。改革者たちは、ここに「教会のしるし」があると仰いました。この営みの中で、皆さんが神の御前に進み出、ご復活のキリストにお会いいただき、主に従う道を見出していただけるように、わたしどもは心砕いています。けれども、この営みの中で確かに主イエスの存在を認め、主イエスが分かるようになるには、皆さんご自身が思い起こし、語り始めることが、大切なのです。わたしたちの間で起こったこと、仲間が経験したこと、語られた御言葉のこと、それらを思い起こし、互いに語り合い、論じ合うのです。それは、いつでもできることです。教会からの帰り道が一人だとしても、ここで語り合い、論じ合うことができます。そして、そのような者として、繰り返し礼拝にあずかる。聖書の御言葉が説かれ聖餐が祝われる礼拝に、留まる。そのような繰り返しの歩みの中で、わたしたちは、主イエスが分かるようになるのです。見知らぬ旅人に過ぎないかもしれない互いの姿を通して、主イエスの存在を知る者となるのです。